

スペシャル・ガラコンサート

～Yamaちゃんのおしゃべりコンサート～52th



Special Gala Concert

2017年6月23日(金) 18時30分開演
アクロス福岡シンフォニーホール

主催:西日本新聞社、スペシャル・ガラコンサート実行委員会 共催:(公財)アクロス福岡
後援:福岡市、福岡市教育委員会、(公財)福岡市文化芸術振興財団、アルト・クラブ大濠



© Naohiro.Iwanaga

本日はご多忙の中、「スペシャル・ガラコンサート Yamaちゃんのおしゃべりコンサートinアクロス福岡」に多数ご来場いただき、誠にありがとうございます。

クラシック音楽をもっと身近に感じていただきたい！そして一緒に楽しみたい！という思いから、平成18年に「Yamaちゃんのおしゃべりコンサート」が始まり、51回続けてまいりました。おかげさまで、九州交響楽団に32年間在籍、昨年10月に還暦を迎え、その記念の演奏会として、アクロス福岡シンフォニーホールにて「スペシャル・ガラコンサート」を開催することになりました。

5歳のとき、初めてヴァイオリンを手にした日から、たくさんの挫折と寄り道を繰り返し、それでも、いくつかの大きな運命の手に引き寄せられ、音楽の道を進んでまいりました。その運命の手は、音楽の師、故榊貞夫先生、店村眞積先生（東京都交響楽団特任首席奏者）、人生の師、吉田一成先生（前くらしき作陽大学副学長）、そして、亡き父と、遠く鹿児島からただ身体のことだけを心配しながら応援し続けてくれている、88歳の母の手であります。

本日は、国内外でソリストとして活躍される演奏家の皆様、九州交響楽団、九州室内合奏団の仲間、さらにフリー奏者として活躍している友人たちが集まってくださいました。そして、嬉しいことに多くの教え子たちも駆けつけてくれました。

今夜、私は何度となく演奏したこのアクロス福岡シンフォニーホールのステージで、いつもと違う客席を見ながら、たくさんの想いに包まれて演奏することになるでしょう。私をこのステージへと導いてくださった多くの方々へ、言葉にならない感謝の気持ちを込めて精一杯演奏したいと思います。

最後に、この演奏会を開催するにあたり、多大なお力添えを賜りました関係者の皆様、また、多くの時間とお心を費やし、この演奏会実現を自分のことのように思い、私の側で力を尽くしてくださった実行委員会の皆様に心から感謝いたしますと共に、御礼を申し上げます。

これからも、九州、福岡の音楽振興のために力を尽くしていきたいと思っておりますので、ご支援、ご協力、お願い申し上げます。

山下 典道

プログラム

石川亮太 TADENIZE!

三橋隆幸 虹

サクソ 蓼沼雅紀

J.S.バッハ:2つのヴァイオリンの為の協奏曲 ニ短調 BWV1043

第1楽章 ヴィヴァーチェ (Vivace)

第2楽章 ラルゴ・マ・ノン・タント (Largo ma non tanto)

第3楽章 アレグロ (Allegro)

第1ヴァイオリン 三上 亮 第2ヴァイオリン 後藤龍伸

ナポリ民謡:カタリ・カタリ

ナポリ民謡:オオ・ソレミヨ

テノール 青柳素晴

(休憩20分)

J.N.フンメル:ヴィオラとオーケストラの為の幻想曲 ト短調 作品94

ヴィオラ 山下典道

ベートーベン:ピアノ協奏曲 第5番 変ホ長調 作品73

第1楽章 アレグロ (Allegro)

ピアノ 小川典子

ベートーベン:交響曲 第7番 イ長調 作品92

第4楽章 アレグロ・コン・ブリオ (Allegro con brio)

指揮 清水醒輝

KANREKI スペシャルオーケストラ

ピアノ
小川典子 *Noriko Ogawa*



リーズ国際コンクール入賞を機に、英国と日本を拠点として活躍。世界の主要オーケストラ・指揮者との共演や、室内楽、リサイタル等で世界各国へ演奏旅行を行う他、国際的なコンクールでの審査、各国でのマスタークラスなど、国際的で多彩な活動を展開している。録音は北欧最大のレーベルBISと専属契約を結び、30枚に及ぶCDをリリース。2012年には全曲録音を終えた「ドビュッシー・ピアノ全曲作品集」ボックスCD及び、「モーツァルト：ピアノソナタ集」を発売。モーツァルトのCDはレコード芸術誌特選盤に選出された。2014年1月には、英国BBCラジオ3の名門番組「CD Review」の「Building a Library」コーナーで、小川典子の演奏するドビュッシー「映像」が、評論家の「最高の推薦録音」として、数々の名演の中からトップチョイスに選出され、大きな注目を集めた。2012年英国マンチェスター・ブリッジウォーターホールで開催された「Reflections on Debussy」音楽祭では企画担当を務め、自らもドビュッシーを中心としたプログラムでリサイタルや室内楽を行った他、BBCフィルとの共演、子どものための教育プログラム、マスタークラス、アウトリーチ、日本文化の紹介等も行い音楽祭を成功に導いた。2013年は初のBBCプロムスへの出演で注目を集めた他、ポーランド放送響、モスクワ放送響、チェコ・ナショナル響の英国ツアーのソリストとしても出演。また非常に珍しいイランでのリサイタル及びオーケストラとの共演も行い大きな話題となった。2014年もBBCプロムスへの出演や、リサイタル、海外オーケストラとの共演の他、菅野由弘「ピアノの粒子3部作」の録音(BIS)が行われた。2015年もロシアでサンクト・ペテルブルク響との共演や、様々な音楽祭への出演。2016年はモスクワ国立交響楽団、BBC交響楽団と共演やシンガポール演奏旅行、日本音楽コンクール、シドニー国際、モトラム国際コンクールの審査の他、7月には生誕150周年サティ・ピアノ曲集のCDもリリース。2016年2月より第10回浜松国際ピアノコンクール(2018年)審査委員長に就任。東日本大震災からの復興に向け、いち早く活動を開始。世界中の聴衆に語りかけ、現在でも東北支援オリジナルカード「黒猫カード」を作成して演奏会場で販売し、その売り上げを寄付するなど、英国赤十字社・英国ジャパン・ソサエティを通じた支援金集めを続けている。英ギルドホール音楽院教授、東京音楽大学客員教授、ミュゼザ川崎シンフォニーホールアドバイザー、「ジェイミーのコンサート」主宰、NAS英国自閉症協会文化大使、イプスウィッチ管弦楽協会名誉パトロン。文化庁芸術選奨文部大臣新人賞受賞、川崎市文化賞受賞。

ヴァイオリン
後藤龍伸 *Tatsunobu Goto*



1964年東京に生まれる。幼少時代をブラジルのサンパウロで過ごし、州立大学の特設講座にてヴァイオリン・和声・対位法を学ぶ。1975年にサンパウロ市ベスト・アーティスト賞受賞。都立芸術高校を経て東京芸術大学入学。在学中に「ヴァンガード四重奏団」を結成、ヴァイオリン、ヴィオラ、編曲、作曲を担当。1993年にカーニバルカンパニー・カメレオンオーケストラ(C3O)を橋爪恵一、山田武彦と共に結成、パスティーシュと即興の技巧を駆使した新しい様式を確立した。1987年よりCOBAのライブやレコーディングに参加。東京シティ・フィル、新星日本交響楽団、九州交響楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターを経て、現在は名古屋フィルハーモニー交響楽団と日本センチュリー交響楽団のコンサートマスターを兼任。日本作編曲家協会、三島由紀夫研究会会員。名古屋音楽大学教授。福岡においては、ミュージックステーション福岡特別講師をつとめ、リベルタ・グループで即興やジャンルを超えた演奏を展開。九大フィル、OBフィル、福岡市民オケ、久留米市民オケ、その他のトレーナーを務める。2002年より3回にわたって、フィルハーモニア福岡の定期演奏会を指揮。2005年よりフツペル平和記念鳥栖ピアノコンクールの本選および受賞記念コンサートなどにて福岡室内合奏団を指揮。九州室内管弦楽団メンバー。

テノール
青柳素晴 *Motokazu Aoyagi*



© Zentsu Eguchi

国立音楽大学卒業。89年首都オペラ旗揚げ公演「オテロ」ロデリーゴでオペラデビュー。95年ベルリン・ドイツ・オペラの首席演出家ヴィンフリート・バウエルンファイントの薦めでベルリンへ留学。ハンス・アイスラー音楽大学で研鑽を積む。「魔弾の射手」マックス、「パリアッチ」カニオ、「ジャンニ・スキッキ」リヌッチョ等を歌い2000年に帰国。二期会公演では04年「イエヌーフ」ラツァでデビュー後、05年3月・07年7月「魔笛」モノスタス、05年11月「さまよえるオランダ人」エリック、07年2月「ダフネ」アポロ、07年11月「天国と地獄」プルート、08年6月「ナクソス鳥のアリアドネ」バッカスで出演し、いずれも好評を博す。また、06年5月には「さまよえるオランダ人」のエリックとして、ドイツ・ハノーファー州立歌劇場より急遽招聘され、バーバラ・シュナイダー・ホフシュテッター(ゼンタ)やヤルン・ツァン(オランダ人)と共演し満員の観衆を沸かせた。08年2月には新国立劇場初出演。09年6月にはあらかわバイロイト旗揚げ公演で「パルシファル」のタイトルロール、10年2月、ヴェルディ作曲「オッテロ」のタイトルロールを歌い好評を博す。最近では調布市民オペラ「トゥーランドット」カラフ、国立音楽大学オペラ「ノイローゼ患者の一夜」のコメンダトーレなどに出演。「第九」「カルミナブラーナ」「天地創造」「嘆きの歌」のソリストも務める。また、東京シティフィル、九州交響楽団など数々のオーケストラとの共演もある。国立音楽大学非常勤講師。アチーブメントプロデュース株式会社所属。一般財団法人東京メトロポリタンオペラ評議員。

ヴァイオリン
三上 亮 *Ryo Mikami*



© Masashige Ogata

東京芸術大学音楽学部首席卒業後、明治安田クオリティオブライフ文化財団、ロームミュージックファンデーションなどから助成金を得てアメリカ南メソディスト大学メドウズ音楽院、ローザンヌ高等音楽院、メニューイン国際音楽アカデミーで研鑽を積む。景山誠治、エドゥアルド・シュミーダー、ピエール・アモイヤル、アルベルト・リジー諸氏に師事。その間、安宅賞、日本音楽コンクール第2位、ブリテン国際ヴァイオリンコンクール特別賞、フォーヴァルスカラシップ・ストラディヴァリウスコンクール第2位など受賞。カメラータ・リジーやカメラータ・ローザンヌのメンバーとしてスイス国内を拠点にヨーロッパ各地で演奏した。2007年ルーマニアエネスコ音楽祭にも出演。2007年に帰国後、札幌交響楽団コンサートマスター、東京芸術大学非常勤講師、日本音楽コンクール審査員など歴任。2013年秋、巨匠ピアニスト、イェルク・デームス氏とデュオリサイタルを開催し、好評を博した。また、2017年春は全国5都市でリサイタルツアーを行った。その他、慰問演奏会、チャリティにも積極的に取り組み、2013年に長崎で開催した福島の農業支援団体へのチャリティコンサートはNHKで取り上げられるなど注目された。ローザンヌ室内管弦楽団、東京交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、札幌交響楽団などとコンチェルトを共演。2008年アルバム「ツィガース」をリリース、毎日新聞紙上で絶賛される。室内楽では、いわきアリオスホールにて結成されたヴィルタス・クワルテット第1ヴァイオリン奏者を務める。サイトウ・キネン・オーケストラ、水戸室内管弦楽団などにも参加する他、全国各地でゲストコンサートマスターとしても活躍。

サクソ
蓼沼雅紀 *Masaki Tadenuma*



東京音楽大学付属高等学校を経て東京音楽大学卒業。第3回ひろば賞コンクールにおいて管楽器部門賞ならびに、ひろば大賞を受賞。JIRA音楽コンクール室内楽部門第1位。第28回日本管打楽器コンクール入賞。ヤマハ新人演奏会、日本サクソフォン第2回新人演奏会、東京音楽大学新人演奏会に出演。これまでに、小池裕美、石渡悠史、中村均、オーティス・マーフィー、須川展也、ジャン＝イヴ・フルモー、原博巳、武藤賢一郎の各氏に師事。ソロアルバム「The Moment」、「TADENIZE」をリリース。国内はもとより、韓国、台湾など海外でのコンサートにも積極的に参加している。サクソカルテット【GARÇON】メンバー。東京音楽大学付属高等学校非常勤講師。

★九州交響楽団

1953年に活動を開始。1973年に改組、のち財団法人化を経て2013年から「公益財団法人九州交響楽団」となり、九州一円の常設オーケストラとしてアジアの交流拠点都市「福岡」に本拠地を置く。指揮者として、初代常任指揮者・石丸寛(現・永久名誉音楽監督)から、森正、安永武一郎(現・永久名誉指揮者)、フォルカー・レニッケ、黒岩英臣、小泉和裕、山下一史、大山平一郎、秋山和慶が歴任し、2013年からは小泉和裕が音楽監督を務める。また桂冠指揮者に秋山和慶、首席客演指揮者に小林研一郎を擁してさらなる充実を図っている。アクロス福岡での〈定期演奏会〉をはじめ、〈天神でクラシック〉、〈名曲・午後のオーケストラ〉の自主公演の他、中学生の未来に贈るコンサート、またオペラやバレエ、合唱との共演、ポップス、映画音楽、ファミリーコンサートなど内容は多岐に渡り、福岡県を中心に九州各地で年間約130回の演奏活動を行っている。これまでに、福岡市文化賞、西日本文化賞、文部大臣地域文化功労賞、福岡県文化賞を受賞。

★九州室内合奏団(旧福岡室内合奏団)

九州室内合奏団は、1989年4月、音楽文化の向上と、質の高い音楽を市民に提供することを目的とし、九州で唯一プロのオーケストラである九州交響楽団の弦楽器奏者により結成されました。これまで、小人数のアンサンブルから、管楽器を加え小編成のオーケストラまで、多彩な形式で、年間20回に及ぶ九州各地での演奏活動を行い、好評を得ています。主なコンサートとしては、毎年10月築城町本庄大楠で開催される「大楠コンサート」。3月に開催されている「鳥栖ピアノステップ・音の夢ピアノコンクール受賞記念コンサート」では、上位入賞者と共演しています。

指揮
清水靨輝 *Daiski Shimizu*



5歳よりヴァイオリンを始める。第57回日本音楽コンクール第1位。増沢賞、特別賞受賞。「若い芽のコンサート」でNHK交響楽団と共演。桐朋女子高等学校音楽科、桐朋学園大学音楽部を共に首席で卒業。安田生命クオリティオブライフ文化財団、文化庁より奨学金を受けウィーン市立音楽院に留学。ドイツ、フランス、アメリカにてリサイタルを行う。これまでに、故小国英樹、故江藤俊哉、トーマス・クリスティアン、各氏に師事。イヴリー・ギトリス、ノーバート・ブレイン、シモン・ゴールドベルグ、ミシェル・シュヴァルベ、サシユコ・ガヴリロフ、各氏のマスタークラスを受講。1998年に帰国し、2001年11月まで新日本フィルハーモニー交響楽団のコンサートマスターとして活動。その他、九州交響楽団をはじめとする国内オーケストラのゲストコンサートマスターを務める。JTアートホール室内楽シリーズ、紀尾井シンフォニエッタ東京、サイトウ・キネン・オーケストラ等多数参加。近年では主にトウキョウ・モーツァルトプレーヤーズで活動。他、室内楽の指揮、又、内藤佳有氏に指揮の手ほどきを受け、キンボー・イシイ氏に師事。同氏の大阪交響楽団、読売日響での公演では度々アシスタントも務め、その音楽性、信頼性の評価は高い。2012年フィンランドにてホルマ・パヌラ氏指揮科マスタークラスのディプロム取得。日本フィル、神奈川フィル、中部フィル、群馬響、浜松フィル、九州響を指揮。他、桐朋学園オーケストラ特別招聘講師、上野学園大学音楽学部非常勤講師、アルカスSASEBOジュニアオーケストラ指揮者、他多数のアマチュアオケの指揮等、多方面にわたる活動を行っている。

KANREKIスペシャルオーケストラメンバー

コンサートマスター	後藤 龍伸	三上 亮	奥野 玄宜 (九室)	
1st. ヴァイオリン	荒田 和豊 (九響) 川辺 梓 (九室) 松本さくら (九室)	大山 佳織 (九響) 工藤 真奈 (九室)	小田 葉月 (九響) 齋藤羽奈子 (九響)	小野田敦子 (九響) 樽見かおり (九響)
2nd. ヴァイオリン	荒川友美子 (九響) 高橋かおり (九室) 南 奈菜 (九響)	緒方 愛子 (九室) 田中 唱 (九室) 松田まさ子 (九室)	貞国みどり (九響) 葉石 真衣 (九響)	佐藤 仁美 (九響) 藤松 敦仁 (九室)
ヴィオラ	木村厚太郎 (指揮者) 田中 茜 (九室) 山下 典道 (九響)	猿渡友美恵 (九響) 田邊 元和 (九響)	正村まどか (九室) 平石 謙二 (九響)	須田 祥子 (東フィル首席) 森下 香蘭 (九室)
チェロ	石原 まり (九響) 永野紗佑里 (九室)	市 博成 (元九響) 長谷川彰子 (九響首席)	小林真由美 (九室) 原田 哲男 (元九響首席)	重松 恵子 (九響) 宮田 浩久 (九響)
コントラバス	伊藤 珠里 (九室) 時津 りか (九室)	井上 貴裕 (九響)	音部 幸治 (元九響)	齊川 信明 (九響)
フルート	永田 明 (九響)	山下 浩二 (九響)		
オーボエ	佐藤 太一 (九響首席)	徳山 奈美 (九響)		
クラリネット	荒木こずえ (九響)	田中美佳子 (フリー奏者)		
ファゴット	菊地 保 (九響)	埜口 浩之 (九響)		
ホルン	岡本 秀樹 (九響)	木村 睦美 (九響)	佐々木悠子 (九響)	
トランペット	八馬 俊也 (九響)	本村 孝二 (九響)		
ティンパニー	森 洋太 (九響首席)			

* 九響：九州交響楽団 九室：九州室内合奏団 東フィル：東京フィルハーモニー交響楽団

母の優しい言葉 ～幼き出会い～

本日お越しの皆様、少しだけ私「山下典道」についてお話させていただきたいと思います。これをお読みいただき、私の音楽人生の足跡を少しでも知ってこの演奏を聴いていただくと、また違う音が聴こえてくるのではないのでしょうか。(この文章は平成23年九州交響楽団、機関誌に掲載された「楽団連載シリーズ46・47」に加筆したものです。)

私は、1956年10月14日、鹿児島で生まれました。両親、両祖父とも教育者という家庭ではありましたが、長男であり初孫ということで子どものころは(?)とても可愛がられました。5歳で近くの唐湊(とそ)幼稚園に入園。これが第1の運命、ヴァイオリンとの出会いです。この幼稚園には当時としては珍しくヴァイオリン教室があり、私は自分から「ヴァイオリンを習いたい」と言い、レッスンが始まりました。しかし、本当に自分から言ったかどうかは定かではありませんが…。

第2の運命は恩師との出会いです。それは、小学2年の冬12月23日。その方は、九州交響楽団創成期に在籍されていた袴(いのり)貞夫先生です。袴先生が東京芸術大学を卒業され、鹿児島大学教育学部に赴任されたことを知り、父が先生のご自宅に私を連れて行ってくださったのです。先生とのレッスンは、母をも巻き込んだ緻密で大変厳しいものでしたが、私に音楽の根っこをしっかりと作っていくこととなります。レッスンに行き、私の弾く音を一音聴いただけで練習不足を見抜いた先生に「帰れー！」と怒鳴られ、追い返されることもありましたが、その厳しさは想像していただけたと思います。そんなとき母は、側で叱ることもなく「みっちゃん、次は頑張ってこようね。」と声をかけてくれました。

2年後、父の転勤で鹿児島市を離れることとなりますが、ヴァイオリンのレッスンを辞めることはなく、鹿児島市の先生の家まで、片道1時間半の道のりを母と毎週通い続けました。この頃から東京芸術大学の井上武雄先生のレッスンも受けるようになりました。2年後鹿児島市へ引っ越し、レッスンへの負担は減りましたが、なんと、中学2年生の春、袴先生が福岡教育大学の教授として赴任されることになるのです。将来、音楽の道に進むと決めていた私は、袴先生を追いかけ、宗像市赤間の城山中学校へ転校します。ひたすらヴァイオリンのレッスンを受けることだけを考えていたのでしょう。

中学校は先生のご自宅に下宿し、一人で頑張っていけると信じていました。が、鹿児島弁がおかしいと学校でいじめられ、辛い気持ちの中、学校とレッスンを半年は続けましたが、とうとう体調を崩し、鹿児島に帰ることになりました。その後中学校は出席日数不足で留年(今はそんなことはありませんが)。以前いた中学校に転校して、少しずつ元気を取り戻しますが、そのぶん音楽(ヴァイオリン)からは、離れ始めました。その後、高校入試も失敗し、浪人。次の年も失敗し、2浪という訳にはいかず、私立鹿児島高校へ入学します。



ヴァイオリンを習い始めた唐湊幼稚園時代



小学5年生、袴先生の発表会にて



尊敬する師匠、店村眞積氏と



鹿児島の自宅前にて、最愛の母と

しかし、音楽をしていたことなど全く知らない友だちと先生の中でとにかく楽しく、愉快地に3年間過ごしました。高校3年間皆勤賞だったことがなによりの証拠です。途中、高校2年から一人暮らしすることになり、自炊生活の時期もありましたが、昼食時間になると友達の手当の蓋を借り みんなのところを回って、クラスで一番豪華なランチを食べ、夜は夜で、友人宅を回り、家族のように食べさせてもらっていました。それに加え、1時間半かけての自転車通学のおかげで、軟弱だった身体はみるみる鍛えられていきます。これでも音楽の道とは反対の方向へと進むのだと、私自身も思っていました。

大学も音楽と関係ない学部を受験、見事…不合格。もしかしたら、違う意味でこれは番外編の運命だったのかもしれませんが。予備校生活も真面目に通ったのは1ヶ月だけで、5月からは知人の建設会社でバイトを始めます。もともと身体を動かすことは好きだったこともあり、身体も鍛えられ、お金ももらえると大喜びで現場に通いました。真面目に勉強していると思っていた父は全くこのことは知らず、このバイトも母が紹介してくれたものでした。母はどんな気持ちで、毎日私を送り出してくれていたのでしょうか。

その年の暮れ、袴先生が倒れられたと聞き、母が私に「先生に逢いこい」と言います。7年ぶりの先生との再会でした。先生は私を見て、「ヴァイオリンは弾いていないのか？来週ヴァイオリンを持ってもう一度おいで」と言われたのです。翌週、私は再び福岡へヴァイオリンを持っていくことになりました。病院の一室での久しぶりのレッスン。その時、どのような気持ちで弾いたのか、どんな音が出ていたのかははっきりと覚えてはいませんが、ただ覚えているのは先生の「もう一度ヴァイオリンをやらないか。君ならできる」という言葉です。この言葉で、私の人生の道は、また音楽へと引き戻されていきました。

しかし、その「音楽への道」という決意の先には、私が想像していた以上に、過酷な生活が待っていたのです。毎日が楽しい気持ちで過ごしていた私にとって、袴先生の家での内弟子生活は、どの芸事もそうであるように、自由な時間など全くなく、朝6時の起床に始まり、家の掃除、先生の肩もみ(これは指の訓練の一つです)、1日10時間を越える練習と、たるんでいた身体も心も1から鍛え直していく作業でした。練習していると、家の中からや外からも先生の「違う！高い！何やってるんだ！馬鹿野郎！」という怒鳴り声が飛んできて、さらに私の心は打ちのめされていきました。

そんなある日。3ヶ月くらいたっていたのでしょうか。とうとう私は、あまりに毎日の生活が辛くもう辞めたいと思い、そのことを母に伝えようと、夜中先生の家を抜け出し、赤間駅の公衆電話まで走っていったことがありました。電話に出た母は、「今日までよく頑張ったねえ。すぐ帰っておいで」と言ってくれたのです。「何を言ってるの。男なんだから頑張りなさい」ではなく…。私は、母に「もう少し頑張る」と言い、泣きながら先生の家に戻りました。母のこの優しい言葉がなかったら、きっと、いえ絶対今の私はなかったでしょう。ヴァイオリンからヴィオラに転向したのもちょうどその頃です。



大楠の下、ライトアップされた幻想的なステージ

その後の努力もむなしく、東京芸術大学の受験に失敗し、当時岡山県の作陽音楽大学に、芸大を退官された井上先生が教授として席を置かれていたこともあり入学しました。大学では、先生方や先輩方に可愛がられ、後輩には恐れられ、音楽をのびのびと楽しく学ぶことができました。たくさんの人生の良い出会いもありました。(挨拶文でお名前を上げた吉田一成先生とのエピソードなど、これについてはまた別の機会にお話できれば。)

いよいよ音楽を生活の柱に置いての人生が決まり、1985年4月九州交響楽団に入団。入団してからは、さらに必死に練習しました。ヴァイオラ奏者として少しでも充実した演奏家人生を送りたいと思っていました。そんな九響に入団して5年が過ぎようとしていた1990年10月、第3の運命の出会いが待っていました。定期演奏会のソリストとして、ヴァイオラ奏者の店村眞積氏がいらしたのです。初めてその演奏を聴いた時、「こんなにすごい音を出す人がいるんだ」と、私は表現しきれない気持ちでいっぱいになり、その感激した思いそのまま、店村先生に私の演奏を聴いていただきました。先生は「今まで勉強してきたことを全部忘れて、1からやり直すなら弟子にしてやる」と一言。それから、まるで初心者のように弓の持ち方、指の押さえ方、音の出し方、ヴィブラートの種類、発音について…。本当にありとあらゆることを、1から教えていただきました。

それからもう17年。私には、音楽を通してたくさんの宝物ができました。その第一が2006年6月から2ヶ月に1回開催している「Yamaちゃんのおしゃべりコンサート」です。このコンサートは、小さなスタジオ規模から、野外で行われる日本三大楠をバックに千人以上の方が来てくださる「大楠コンサート」まで様々な形態で開催してきました。ちょうど2年前、鹿児島之母が初めてこのコンサートを聴きに福岡まで来てくれました。会場にいる母を私が紹介すると、恥ずかしそうに立って会場のお客様に頭を深く下げていました。後で聞きましたが、もしかしたら、そんなことになるかもと妹に言われ、美容室に行ってきたのだそうです。

さて、私は毎回、音楽を通して演奏者と聴きに来てくださる方々の心が通じ合うような温かいコンサートにしたいという気持ちで企画してまいりました。今日のこの「おしゃべりコンサート」は、皆様の心にぽっと温かいものを残せたでしょうか。これからも、一人でも多くの方に音楽の楽しさを感じてもらえるような活動を続けていきたいと思っています。

還暦、山下。まだまだ走り続けます。



おしゃべりコンサートの原点となった大楠コンサートで